［リレー連載］

私のフィールドノートから

【……発見とときめきのフィールド言語学……】

第 23 回

赤嶺　淳
あかみね　じゅん

*

サマ語

図：サマ諸語の分布

写真：サマ人の集落（杭上家屋）

転機

『漂海民』（門田修、一九六六）と『ナマコの眼』（鶴見良行、一九九〇）。

英語学からサマ研究に転換する契機となった二冊である。当時のわたしは、英国と米国を旧宗主国とするインドやフィリピンなどで発達した新英語（New Englishes）と多民族国家における言語政策に関心をいだいていた。その過程でめぐりあった、フィリピン南部の離島群に暮らすサマ社会を紹介する両書に触発され、中央で議論される言語政策ではなく、辺境で実践されている言語政策を研究しようと、フィールドワークを開始したのである。

サマ人

サマ（Sama）とは、フィリピン南西部のスル諸島からマレーシアのボルネオ島東岸、インドネシア東部にまたがるサンゴ礁海

域に暮らす人びとの自称である。他称としてバジャウ（Bajau）あるいはバジョ（Bajo）としても知られるサマは、一般的には家船で移動しながら漁撈生活をいとなむ「漂海民」と考えられている。冒頭に紹介した『漂海民』は、門田が六ヶ月にわたって家船生活者と暮らした記録である。

とはいえ、船上生活の歴史があきらかではなく、海浜部に定住するサマも少なくない。かれらは陸上に住むこともあるが、だいたいは、浅瀬に柱をたてた杭上家屋に居住している。海上居住をこのむのは、マラリアを媒介とする蚊を回避するためである。

サマは、言語学的には、アバクノン（Abaknon）、バラギンギ・サマ（Balangingi Sama）、中央サマ（Central Sama）、パグタラン・サマ（Pangutaran Sama）、南サマ（Southern Sama）、ヤカン（Yakan）、マプン（Mapun）、西海岸バジャウ（West Coast Bajau）、インドネシア・バジャウ（Indonesian Bajau）の九言語集団に分類され（右ページ「サマ諸語の分布」図）、二〇〇〇年時点の話者人口はおよそ百万人と推定される。

サマ人の漁業活動

米や芋など炭水化物をみずから生産しない狩猟採集民の宿命ともいえるが、サマ人のいとなむ漁業も余剰を売るといった消極的なものではありえず、市場に直結したものしか採らない商業性のつよいものである。そんな漁業の特徴は、みずからは消費しない――鶴見良行が特殊海産物とよぶ――干ナマコやフカヒレといった中国を消費地とする海産物の採取に特化してきたことに顕著である。たとえば、一八世紀半ばから一九世紀末にかけてスル諸島にはタウスグ（Tausug）人の王族を頂点にサマ人などの周辺民族を従えたスル王国が隆盛したが、同王国の繁栄をささえたのは、サマ人らが採取した対中国貿易用の特殊海産物であった。

商業への指向性は、今日のサマにもうけつがれている。商品になることがわかるやいなや、かれらはゴールドラッシュさながらにその魚種に殺到する。そして、市場の変化に対応して柔軟に漁獲対象を変更していくのである。

たとえば、一九九七年八月、調査地ではアワビに似たミミガイ採取に沸いていたが、翌年八月に再訪してみると、ミミガイブームはすぎさり、漁民の関心はハタにうつっていた。

ミミガイはサンゴ礁の礁縁部に生息するため、干潮時であれば容易に採取できる。問題は、夜行性であるミミガイの生態を利用して効率よく夜間に採取しようとすると、うまく潮位があわないこともありうる点にある。その場合、防水対策として懐中電灯にビニール袋をまきつけ、腰まで浸かってミミガイ採りにいそしむこととなるが、これは決して楽な作業ではない。単にわたしが新米漁師だっただけかもしれないが、波に足をとられて岩場に尻を

ついたり、倒れまいと踏ん張った矢先にウニの刺を踏みつけたりと、貝をさがすどころの話ではなかった。

このようにめまぐるしく対象魚種が変化するなかで、中国市場むけのナマコだけが、「伝統」的に採取されつづけている。中国料理の特徴のひとつは、乾貨とよばれる乾燥食材を多用することにある。もっとも、干椎茸や昆布、鰹節から出汁をとっているわたしたちには、乾燥食材そのものは珍しくないはずだ。しかし、ナマコはどうだろう。シイタケと干椎茸が風味・食感ともに異なる食材であるように、ナマコと干ナマコも、似て非なる食材である。ナマコ自体に味はないため、調理する食材の旨みを吸収させたナマコのゼラチン質の食感を楽しむのである。

ナマコを採るには、基本的には浅瀬を渉猟するだけでよい。潮がひいたサンゴ礁で子どもがナマコをすなどる光景は、どことなく牧歌的でもある。しかし、そのような牧歌的なナマコ漁は、今日においては虚像である。それは、浅瀬のナマコが採り尽くされており、一〜二個拾っただけでは、小遣い稼ぎにはなっても、生活の糧を得るにはほど遠いからである。

今日の東南アジアにおけるナマコ漁の実態は、ダイバーが潜水器を用いて専業的におこなうものである。漁場も、居住地から離れた遠方であることがおおい。インドネシアのサマ人のなかには、オーストラリア北部まで越境操業するものも少なくないし、フィリピンのサマ人には南シナ海の南沙諸島まで船団を繰りだす事例も散見される。潜水深度が、水深五〇メートルに達し、潜水病にたおれるダイバーもめずらしくない。

トレパンの語源とサマ

ナマコの英語はsea cucumberであるが、トレパン（tre-pang）というマレー語（マレーシア語・インドネシア語）に起源する単語も、市販の英語辞書には記載されている。

OED（『オックスフォード英語辞典』）は、トレパンという外来語が英語に入ってきたのを一七八三年としている。しかし、その説明は、「セレベス島（注――東部インドネシア）あたりの産物で、黒い、スポンジ状のマッシュルームのような植物」（傍点筆者）と記述するように不正確なものである。同辞典によるかぎりでは、伝聞情報によらず実際にナマコを観察した文書は、英海軍が一八〇二年に記した「ポルトガル人がよぶところのbeche de marは、マレー人がよぶところのtrepong」との報告であるようだ。

OEDは、膨大な文献から、初出例を拾いだすという丹念な作業の結晶であるが、印欧語族以外から借用された単語の語源の考察は不十分である。わたしはトレパンの語源は、マレー語ではなく、南サマ語のムカデ（lalipan）だと確信している。

一般にフィリピン諸島では、バイカナマコ（学名 *Thelenota anamas*）は、talipan、taripan、dalipan など、いずれもよく似た音でよばれている。しかし、それらの言語の話者に、意味を尋ねると、「ナマコの名称」と答えるだけであるし、語源を説明できる人にいたっては皆無である。

きれいな茶褐色が表現できないのが残念であるが、左の写真をみてほしい。この奇妙なナマコをサマ人たちがムカデと形容することに納得がいくであろう。

ちなみにムカデをあらわす単語は、それぞれ ulahipan〔タガログ語〕、alahipan〔ヒリガイノン語〕、uhipan〔セブ語〕、ulalahipan〔ワライ語〕、lahipan〔タウスグ語〕といったように個別に存在していることからも、フィリピン諸島におけるバイカナマコの名称としてのタリパン／ダリパン系の単語はサマ語からの借用である蓋然性がたかい。

バイカナマコ

では、スル諸島から南方への伝播はなかったのか？　つまり、現在のフィリピン、マレーシア、インドネシアといった国家が成立する以前の過去において、ムカデナマコという名称がフィリピン諸島だけに定着したと考える積極的な動機づけはなく、当然、サマ人の生活圏でもあった、今日のインドネシアの島じまにも膾炙したことが想定される。

インドネシア語でナマコの総称は、OEDにもあるようにトレパン（trepang）である。そして、くだんのバイカナマコは、インドネシアでは trepang nanas とよばれている。nanas はパイナップルである。

いつごろから、「パイナップルナマコ」との名称がインドネシア諸島に普及したのだろうか。また、パイナップルという形容は、どの地方語に由来したのであろうか。それを説明するだけの資料を持ちあわせていないが、パイナップルナマコとは、現在のインドネシア共通語における名称であって、地方語には別の呼称が存在している点に注意したい。たとえば、中部スラウェシのサマ人たちは、このナマコを、bala? talipaŋ とよんでいる。バラはナマコ、タリパンはムカデの意である。つまり、ナマコもムカデも、音は多少変化しているものの、フィリピンのサマ語と同様の表現となっている。

このことから、わたしは、スル諸島のサマ語がマレー語に影響をあたえたということではなく、インドネシアのサマ語でムカデ

をさすtalipanがナマコの総称として借用され、*talipan〉*taripan〉*taripan〉*tarepan〉trepanと変化したと推定するにいたったのである。

刺参

そもそも、なぜ、このナマコが代名詞的にもちいられるようになったのであろうか。トートロジーな説明でしかないが、バイカナマコが、トゲトゲした「ナマコらしいナマコ」であるからだ。

ナマコらしさは、なにもサマ人が決めたものではなく、消費者である漢人のセンスによっている。清代に編まれた『本草綱目拾遺』の「海參」（ナマコ）の項に、「有刺者名刺參無刺者名光參」とあるように、中国では刺のあるナマコを刺参（ツーシェン）、刺がなくツルツルしたものを光参（クワンシェン）と総称する。ここでの「刺」とは、背面と両側部に縦列する、いわゆる突起である。つまり刺参とは、種ではなく、ナマコの形状に由来する分類呼称なのである。

一般に刺参は、種数が少なく、流通する四〇種のうち、わたしたちに馴染みのマナマコとバイカナマコのほか、数種にすぎない。このようなナマコっぽいナマコが、一八世紀の東南アジア東部海域でも珍重されたことは想像にかたくない。なお、漢人はムカデではさすがに色気がないと考えたのか、刺を梅の花にみたて、梅花参（メイファシェン）とよんでいる（和名のバイカも漢語からの翻訳借用である）。

以上のようにOEDがマレー語起源とするトレパンが、サマ語の「ムカデナマコ」に由来すると仮定することから、どのような展望がひらけるだろうか。

これまでに語られてきた「船棲み」という特異な生活様式をもつ零細な漁民イメージとはことなり、一九世紀以前から中国市場をターゲットにしたナマコ産業の中心にサマ人が位置し、東南アジア東部海域を縦横無尽に活躍したことを喚起させてくれるのだ。

もとより右記のシナリオは、今日、断片的に使用されている語彙からの推察の域をでるものではない。トレパンの英語への借用経路については、机上の歴史言語学的操作に満足せず、スペイン語やオランダ語で記された軍人や商人の航海記録などを丹念に読みこみ、トレパンがどのような文脈で使われているのかを調べるとともに、周辺言語でのフィールドワークも必要となる。はてしない作業になるだろうが、一歩ずつすすめていきたい。

（名古屋市立大学人文社会学部／東南アジア地域研究）

Information

サマ語研究と海域東南アジア史の再構築

言語学的歴史像は、実際の地域史とどのような関係にあるのだろう？

フィリピン、マレーシア、インドネシアの3ヶ国にまたがる広大な海域に分布するサマ諸語は、9言語に分類され、およそ100万の話者人口をもつ。そのようなサマ諸語の鳥瞰図を描いたのは、夏期言語研究所（SIL）のPallesenである。

中央サマ語に堪能であった同氏は、SILの組織力を駆使して収集した膨大なデータから3000語のサマ祖語を再建し、系統樹を提示してみせた。

文字記録をもたないサマ諸語の再建にあたり、かれは伝統的な歴史言語学の手法に慎重であったという。わたしは、この姿勢を評価しているが、それは、Pallesenが問題とする文字記録の有無に帰せられるべきではなく、高い移動性をほこるサマ文化とサマ社会が経験した近代を考慮してのことである。

実は、移動性の高さは、サマ人にかぎったことではなく、東南アジア海域世界全体にあてはまる現象である。それは、同海域には、知らない土地で人生修行をつむことが尊ばれる価値観が存在するためである。

こうした地域性にくわえ、16世紀から同海域をおおった植民地期には、軍事目的のみならず農業・海洋生産目的の労働力として奴隷需要が生じ、奴隷調達のための海賊行為が頻繁に組織されたため、奪略から逃れるために人びとは移動をくりかえさざるをえなかった。もちろんサマ人も、例外ではありえなかった。

このような認識にもとづき、わたしは、歴史言語学が対象とする雄大な時間軸を排し、過去100〜150年間にサマ人たちが経験した人口移動を、具体的に把握することを目的に、おなじくサマ研究にとりくむ文化人類学者の長津一史氏と、この10数年間、インドネシアとフィリピンの島じまを歩いてきた。

調査では民俗語彙をふくめた100語余の語彙票に文法標識をみちびくための50文例を収集するとともに、集落の起源についての口承史や婚姻や漁業などによる移動の範囲（生業圏）について聞きとりをおこなっている。

調査成果の1例を紹介しよう。スラウェシ島北部には、奴隷としてフィリピン南部から20世紀初頭に連行されてきた記憶をもつサマ人集落があるが、そこのサマ語は、インドネシアのサマ語を基礎としながらも、南サマ語の要素をもつ混成語なのである。このような混成語は、程度のばらつきがあるものの、スラウェシ島北部からカリマンタン島南部にかけて断続的にみとめられる。

この言語の実態を記述し、その生成過程を解明することは、19世紀に西・蘭・英の三ヶ国が覇権をあらそった、スル諸島とカリマンタン島、スラウェシ島にかこまれた海域の複雑な歴史を再構築することにほかならない。

言語学が東南アジア地域研究に貢献できる可能性はここにある。